



笠松の偉人

はた つな

煙繫神社にまつられた名代官 酒井 七左衛門

さか い しち ざ えもん

◆◆◆ シリーズ③ ◆◆◆

—松枝輪中を守った煙繫堤の大恩人—

煙繫神社は岐阜市柳津町のカラフルタウン東側にあります。この神社にまつられている一人は、尾張藩北方奉行所の名代官 酒井 七左衛門です。

木曽三川の下流域の人々を水害から救うために、薩摩義士によって行われた命がけの宝暦治水はあまりにも有名です。この工事のおかげで西濃地域の水害は激減しました。しかし、松枝輪中では工事後、川の水が逆流し洪水の被害にあうようになりました。このため輪中の農民は堤防を造ることを許可して欲しいと、奉行所に願い出ました。しかし、近隣の輪中の人々から強い反対を受けたため、許可はされませんでした。松枝輪中の農民4人が北方奉行所に強訴しましたが、投獄され獄死しました。松枝輪中の農民は正式な堤防を造ることが許されないで、畑と畑を盛り土で繋いで堤防を造りました。1870年に農民の執念とも言べき煙繫堤の長さは1600mにもなりました。近隣の輪中の人々は代

官に強く抗議しました。しかし、酒井代官は「流れた土を元に戻しているだけだ。」という松枝輪中の農民の主張を認め、築堤を黙認しました。この事態をただすため、江戸幕府は酒井代官を召喚しました。酒井代官は「松枝輪中だけを水害で苦しめてはいけない。」と主張しました。幕府は酒井代官の行った行動を賞賛し、堤防を造ることを許可しました。このように酒井代官が信念を貫いたことを讃え、松枝輪中の人々は「煙繫大宮神」を建立し、煙繫堤の大恩人を今でもおまつりしています。

(詳しく知りたい方は笠松町のホームページの道徳のまち笠松のバナーをクリックし「モラルセンス一覧」のNo.12を参照願います。)



門間の慈眼寺にあるお墓

かきまつの民話「替むかし」

誓願寺の門前市④

「ほんでもよう。よそものわたいらに誓願寺様がどう言やあすかわからんに。」
「あかんでもともとや。いっぺんお頼みしてみよか。」
おしよう様は、ふたりに頼まれると、
「ええ思いつきや。出してみんさい。三百年も前にや市が、ひと月に六ぺんもたつたそうじゃ。それが笠松に町並が出来たはじめらしい。十四日だけでも、昔の市のようになると、ええことだわなあ。」
おしよう様の許しをもらってふたりは、その足で門前の米屋へ行ってむしろを頼むと、主人は、
「お灸も、にぎやかになるなも。」

と喜んで、貸してくれた。

次の月。十四日を待ちかねていたふたりは、はぎれや下着、野良着などを包んだ風呂敷づつみを背おい、誓願寺へやってきた。

むしろいっぱいにならされた品物は、百姓家のおっかさんたちの評判となり、よう売れた。「十五の娘に合うかすりはないかなも。」

「おしかったぜえも。さっきまでここにあったけどなあ。売れちまったな。」

「おいしいことしたなあ。うちの娘に羽織下でも作ったろと思つたに。」

「女の子は、一枚作つたるとよろこびますでなも。」
つづく